進路通信 vol.7　令和 5 年 11 月 16 日（木）　昌平高校進路指導部

■期末考査に向けて

11 月 27 日（月）から 11 月 30 日（木）まで 2 学期期末考査が実施されます。順調に学習は進んでいますか？　大学等の学校推薦型選抜（指定校制・公募制）での入試が先週末に実施された 3 年生諸君も多くいたかと思われます。入試が終わり、一段落ついたと考えている諸君もいるかと思いますが、気持ちを入れ替えてしっかり臨んでほしいものです。

1・2 年生諸君も毎回、『進路通信』で指摘していますが、1 回 1 回の定期考査にしっかりと学習したうえで臨んでほしいと思っています。3 年生になって入試を迎えている頃（※特に推薦入試での進学を考えている諸君！）、「1・2 年生のうちからもっと勉強しておけば良かった」とか「評定平均値、何とかなりませんか？」などと相談を受けるケースが必ずあります。「後悔先に立たず」です。日頃、担任の先生、各教科の先生方から「普段の積み重ねが大切」などという話を繰り返し聞かされているのではないかと思いますが、本気になって受けとめ、「自分の問題」として、よく自覚してほしいものです。祝日や休日をうまく活かして計画的に取り組みましょう。

■大学等の出願での注意事項（1・2年生も要確認）

今年度の 3 年生が大学などの入試に向けて準備を進めていく中で、いくつかミスがみられました。今後も同じようなミスが起こらないとも限りませんので、1・2 年生も下記の点について、よく注意してほしいと思います。

まず、本校に寄せられている全国の大学や短大の「指定校一覧表」ですが、3 年生の各クラスおよび保護者の方には配信していますが、1・2 年生には配信していません。各大学の学部学科の評定平均値が毎年のように変わる大学もあり、「志望校の評定平均値は、〇〇くらい取っていれば大丈夫だ」と思い込んでしまうのを避けるためです。過去に 2 年生の頃から進路指導室に頻繁に来ていた生徒が「□□大学は、評定平均値を△△くらい取っていれば大丈夫」と思い込んでしまい、3 年生になってから学校に届いた評定平均値が大幅に上がっていて基準に達せず、受験できなかったというケースがありました。1・2 年生でも希望者は進路指導室で確認してもらって構いませんが、あくまで参考程度に見てもらいたいと思います。

本校に来ていない学校を指定校制で希望したい場合は、5 月の連休明けまでに進路指導部に相談するように年度初めに 3 年生諸君に話していますが、今年度は例年以上に「指定校一覧表」を提示した 7 月以降に 3 年生諸君から相談されるケースが多かったです。難関とされる大学は難しい（※まったく相手にしてもらえない）のですが、7 月頃に各大学に「指定校を認めていただけないか」と相談してみて、「今年度に限って」という条件つきですが、認めていただけるケースが多くありました。大学側も一定水準に達している学生の確保を念頭に置きつつも、「確実に入学してくれる学生がほしい」のだなと感じます。指定校制の追加については大学によりけりで、「3 月までにご相談いただければ、次年度の指定校に反映させる場合がある」などと回答していた大学もありました。多くの大学は指定校に関する教授会を 5 月から 6 月初旬ごろにかけて実施するものと思われますので、先の 5 月の連休明けまでに相談してというのはそれが根拠になっているのですが、早ければ早いに越したことはありません。しかし、先にも記したように 7 月頃に大学に相談しても対応していただけるケースが増えているということで、本校に指定校の枠がない大学にどうしても行きたいという場合にはぜひ相談してほしいと思います。ただし、当然ですが、必ずしもすべての希望を各大学に受け入れていただけるわけではないのでその点は注意してください。

先に記した決定的なミスの 1 つは、指定校制で必要な書類の様式を「〇〇大学 募集要項」で検索し、1 番上に「令和 5 年度入試」と表示されたことから、間違いないと思いダウンロードしてしまい、それに必要事項を記入して提出してしまったというケースがありました。本来、今年度の 3 年生は、「令和 6 年度入試」に該当します。したがって、現 2 年生が受験するときには「令和 7 年度入試」となりますし、現 1 年生は「令和 8 年度入試」を受験することになります。今年度が「令和 5 年度」であることから、どうしても「令和 5 年度入試」という文言に違和感を覚えなかったようですが、間違わないように気をつけてください。大学側としては、ホームページから入試関係のページをクリックし、適宜ダウンロードしてほしいと考えているようです。

近年は受験票に添付する顔写真が自分でスマートフォンなどで撮影したものでも認められるようになっていますが、一部にこの写真を「証明写真」として提出して良いものかと思われるもので出願している人がいました。サイズが小さかったりして技術的に難しいケースもあるようですが、適切な写真で出願してしてほしいと感じました。

他にも例年指摘していること等、いろいろと注意を要すると感じたことがありました。今後の指導の際に活かしていきたいと思います。

■校長室前の合格者名・内定者の札について

標記の件について、できるだけ早く書きたいと考えていますが、多忙によりなかなか書けないでいて、大学合格者などから「早く書いてほしい」という声が寄せられています。現時点で 50 名以上が各学校や企業から合格や内定をいただいています。期末考査前までには書くように努力しますので、もう少しお待ちください。

■医療創生大学・薬学部の先生より

先日、医療創生大学薬学部の先生２名が来校し、懇談されて行きました。本校の卒業生で、医療創生大学薬学部に所属している人は現在４名いますが、大部分の人はがんばっているようです。がんばっている卒業生が多いことから、本校進路指導部の教員と懇談したいという運びになったようです。

その中で指摘しておられたことを書いていきたいと思いますので、医療創生大学の薬学部を希望する者に限らず、ぜひ参考にしてほしいと思います。

先生方２名が特に強調されていたのが、「理系と言えども、数学や理科だけでなく、国語力をしっかりと身につけて入学してほしい」ということでした。授業で使用している生物や化学のテキストを見せていただきましたが、かなりの分厚さでした。毎週（？）、レポート課題が出されるようですが、テキストをしっかりと読み込んでまとめるだけで 3～4 時間は要するとのお話でした。幸い、本校の卒業生の多くは、そのレポート課題にしっかりと取り組んで学力を向上させているとのことでしたが、国語力がないと厳しいと繰り返し話されていました。

大学では指定されたテキストだけでなく、図書館などで関連するさまざまな文献を探して参考にし、「参考文献」として、レポートの最後に文献名を記載することになります。レポートなどを書く際、参考文献が多いほど、評価が高くなるとも言われます。

「文献を読む」、「レポートにまとめる」のは、いずれも「国語力」に繋がりますので、このことを自覚して読書をする習慣、メモをとる習慣を身につけてほしいものです。

■修学旅行についてまとめておこう！

２年生の一部の生徒諸君は、10 月に実施されたグアムへ修学旅行に行ってきました。先日、「国際理解」の授業でグアムで学んできたことをまとめたものについて発表を聞きましたが、食べ物など「異文化体験」をしてきたようです。ぜひ記憶が新しいうちに、写真や動画なども活用して自分なりにまとめてほしいと思います。今回の経験を通して、「外国」に興味・関心を持った生徒諸君は多いようです。筆者も以前はよく外国に行っていましたので、「異文化に触れる楽しさ」は十分に理解しているつもりです。発表者の多くがグアムに残る戦跡について触れていましたが、いろいろなところで戦争について学ぶ機会も多くあると思いますし、今、世界で起きている問題について強く関心を持ってほしいと思います。第二次世界大戦中、旧日本軍がグアムを占領した時期があると知って、ショックを受けた諸君も多かったことでしょう。

■原辰徳監督、退任

今年度の東京ドームでの最終戦後、プロ野球、読売巨人軍の監督、コーチ、選手が勢ぞろいし、ファンに対して１年間の声援に対する感謝の意思を示す機会がありました。その際、監督である原辰徳氏が挨拶をしましたが、これでもう原氏が監督に復帰することはないだろうなと感じました。「選手として 15 年、コーチとして 3 年、監督として 17 年（※監督 17 年は通算年数）、35 年間戦い抜きました」。巨人軍一筋のプロ野球人生でした。

原氏は高校時代から注目されていました。原氏の所属する東海大相模高校の監督である父・貢氏との親子鷹で、１年生からレギュラーとして活躍し、甲子園には春・夏合わせて 4 回出場。１年生の春の全国選抜では準優勝、２年生の夏の全国選手権ではベスト 8 など、優勝には一歩届きませんでしたが、中心選手として活躍しました。その後、東海大学に進み、在学中、春と秋の計 8 回のリーグ戦のうち、7 回の優勝に貢献、3 度最高殊勲選手に選ばれました。さらに、首都大学野球リーグの打撃三冠王に 2 回輝くなど、1980 年のドラフト会議では目玉の選手でした。

ドラフト会議では巨人をはじめ、4 球団が指名し、次年度から監督に就任することになっていた藤田元司氏がクジを引き当て、巨人への入団が決定しました。クジを引き当てた藤田氏の満面の笑みが印象に残っています。

実は 1980 年は巨人軍にとって非常にピンチの年でした。3 年連続で優勝を逃して長嶋茂雄監督が解任され、中心打者だった王貞治選手もシーズン 30 本塁打を放ったものの、「自分のバッティングができなくなった」と引退を表明しました。そのような中での「巨人軍・原辰徳」の誕生は、過剰な期待につながっていきました。それでも、入団から 3 年目くらいまでは期待通りの活躍をし、リーグ優勝や日本一に貢献し、入団 3 年目にはセ・リーグ打点王、MVP に輝きました。しかし、ファンの期待はさらに高まり、マスコミも含めて「長嶋茂雄のようにチャンスに強いバッティングができないようでは」とか「王貞治のようにホームランを年間 40 本以上打てないようでは」などと言われるようになり、次第に重圧になっていったのではないかと思われます。

原氏の後輩で「天才打者」と言われた吉村禎章選手が、1988 年 7 月の北海道・札幌円山球場でのレフトの守備の際にセンターを守っていた選手と激突して大怪我を負いましたが、この事故がなければ、吉村選手は華々しい活躍をしていたでしょうし、良き後輩と成績を競い合い、原氏が一人で重圧を背負わなくても良かったのかもしれません。原・吉村のコンビでの活躍をもう少し長く見たかったと思っていたファンは多いことでしょう。

みなさんは「監督・原辰徳」のイメージの方が強いと思いますが、ある巨人軍 OB は「原（監督）の野球に対する考え方は深い」と評価していました。ここ数年はペナントレースで結果を残せず苦しい思いをしていたと思いますが、現役引退時に話していた「夢の続き（※監督として巨人に戻ってくること）」を見事実現し、一時期いろいろ問題があったとはいえ、ファンに夢を与える采配を振るったのではないでしょうか。

最後に、本校野球部の伊藤博康前監督の話を紹介してこの稿を閉じます。伊藤前監督は巨人軍在籍中、原氏と関わることが多かったそうですが、「原さんは絶対に他人のことを悪く言わない人」とよく話されていました。自分がどんな形でマスコミから叩かれようと、そのマスコミのことを悪くは言わなかったようです。ちなみに、第 2 次原政権時代でしょうか。原氏は野球選手として最もつらかったこととして、高校時代、自分がミスしたときに他の選手の倍以上の割合で監督である父・貢氏に徹底的に指導されたことを挙げており、プロに入ってマスコミから叩かれたことについてはそこまでつらいことではなかったと述べていたことがあります。原氏は今年で 65 歳になったそうですが、最後の晴れやかな笑顔は、現役時代に言われたまさに「若大将」そのものでした。

文責：清水聖（進路指導主事）